

敗戦後のベビーブーム、団塊の世代。

物質はまだ乏しく子はあふれた時代の遊

びや風俗はよく回顧され、記録されるが、多くは町（都市部）のようである。

往時の農山村の子らの世界をイラスト入りで活写した「耕地の子どもの暮らしと遊び」という本が出た（フェイスリビューション刊）。

著者、高橋喜代治さんは立教大学で国語科教育法などを指導する特任教授である。1

949年生まれの団塊の世代



ka-ron 二研 木玉

論火

で、埼玉県の西奥、秩父地方の旧倉尾村（現小鹿野町）長沢耕地に育った。

秩父では散在する農業小集落を「耕地」と呼ぶ。

平地は限られ、麦、野菜、こんにゃく、養蚕などを手がけ、家畜を飼い、みそ、しょうゆ、紙も自給した。

長沢は15戸ほどだったが、子が多く群れるように遊んだ。高橋さんはその空気を一茶の句「雪とけて村いっばいの子どもかな」にたとえる。

遊び。例えば、メンコは「ぶつつ

記録の宇宙小

け」といった。その一つの遊び方「どんぼ」とは――。

Aがメンコを柱にぶつけて飛ばし、次のBが同じように飛ばしたメンコがAのメンコの近く一定の距離内に落下す

ると、AのメンコはBのものになる。一定距離とは、広げた親指と小指の先の間隔だが、爪を伸ばす者が現れ、爪は指かと言い争いになった。

メンコの長嶋茂雄も朝潮も赤胴鈴之助も、テレビが普及していない時代、外の世界に開いた窓でもあった。

本は、今はほとんど見られ

なくなつた遊びや道具の作り方、動物や野生植物などにまつわる知恵、行事なども振り返る。子らの「手伝い」は不可欠な労働力だった。

忘れがたい体験がある。夏の暑い日、往還で2倍ぐらいのアオダイショウに出くわし、興奮して遊び仲間と踏んだり、たいたいたりした。「やめろ」と叫んだのは往還沿いの家のおばあさんだ。

「ヤスが帰ってきたんだ。ヤス早く逃げろ」。ヘビは草むらに消えた。「ヤス」は南方で戦死した息子だった。

60年代、農山村は変容した。高度経済成長である。働き手は現金収入を求めて次々町に出る。テレビ、洗濯機、冷蔵庫、ガスが暮らしも、子らの世界も変えた。高橋さんは高校を出ると秩父を離れ、東京で新聞奨学生として配達をしながら大学に通った。

そして今過疎と少子高齢化が進む。育んでくれた人と土地の面影を残したい、が出版の動機だが、「小宇宙」から見る昭和戦後の一断面になつたようだ。（専門編集委員）